

# 草庵仏教

第132号  
(発行日)  
2001年6月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX(0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 開法会ご案内 》

- \* 同朋の会(念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋西宮店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 靖国神社問題について

**L** 「新聞などで閣僚の靖国神社参拝がしばしば問題になります。なぜでしょうか」

**D** 「積極的に靖国神社に参拝する政治家たちが、お国のために戦争で亡くなられた軍人戦死者のおかげで、今日の日本の繁栄がある。お国のために戦って亡くなられた方々に感謝のまことを捧げるため、靖国神社に参拝するのは当然であり、靖国神社も国家が護持すべきである」と発言しています」

**L** 「こういう言葉を聞くとともに、だという気もしないではないのですが」

**D** 「心情的にはそういう感じもします。ことに遺族の中には、(国家のために亡くなった)から国家が祀ってほしい」と思う方々がおられることは理解できます。ただそこにはいくつかの問題があることを冷静に認識しておかなければなりません」

**L** 「どうい問題があるのでしょうか」

**D** 「たとえば、かつての蒙古来襲は、蒙古が日本に攻めてきたので、日本の国を護るために日本の多くの武士が戦って亡くなりました。これはたとえ鎌倉幕府の権力維持のためという意味があっても、全体的には日本のた

めに戦い、そして亡くなられたといえましょう。しかし今度の戦争は、アジア各地に出兵し、それによって多くの現地人が殺されました。こうした日本軍の出兵について、一部の人は西列強の侵略を防ぐため必要だったといいますが、出兵によって大変苦しめられたのは西列強よりも東アジアの多くの現地人でした。ですから、今度の戦争は侵略的性格をもったいたこととは否定できません。戦争の理

念は(アジアの解放)といっても、実際にしたことはアジア各地での日本の植民地支配だったというのが今や常識です。その証拠に、アジア諸国での日本軍の行為に感謝しているアジアの国は一つもないことです。

日本人の心情としては今度の戦争を、(日本を守るため)と思いたいのはやまやまですが、歴史上の事実はそうではなかったのです」

**L** 「じゃあ今度の戦争での日本軍の出兵は犯罪なのですか」

**D** 「戦争犯罪といえば、出征兵士だけでは無論なく、戦地へ軍隊を送り込んだ人たち、いわば軍部や政治家の戦争責任は重大ですし、産業界、またそれに賛同したや宗教界も当然罪を負っています。さらには戦勝国の西

欧列強も今度の戦争をひき起こした要因をいくつも持っているから、戦争犯罪はまぬがれないですね」

**L** 「そうすると戦争犯罪に関わりながら生き残った人たちが多いことを考えると、戦没者たちは戦争の犠牲者であるといえま

すね」

**D** 「ええ、生き延びた多くの人たちがいるにもかかわらず、悲惨な場所で亡くなられたのですからね」

**L** 「軍人の戦死者を戦争の犠牲者というのと、どこからか(英霊を馬鹿にするのか)という声が聞こえそうですが」

**D** 「こうした戦死者を大事に思うことは、今度の戦争を肯定したり美化して、戦死者を日本の英雄や神のように祭り上げることなのでしょう。なるほど、自己の利害を離れて一心に我が身を捧げたという点は大変尊いことです。それは私たちも受け継がねばなりません。ただ(いのちを何に捧げた)かは、不問にしてはならないと思います。そこに目をつぶることの出来ない問題があります」

**L** 「そうすると、一番の戦争犯罪は戦争に駆り立てた指導者たちにあるのですね」

**D** 「そう思います。今度の戦争では、日本は他国の民衆への加害者であり、同時に軍人戦没者は戦争の犠牲者であったと思います。だから戦死者を祀るとい

うことは、戦争を美化し、英雄扱いすることではありません。戦死した人たちの魂の叫びに静かに耳を傾けることが大事だと思います。そうすると、戦死した人たちの願いは、(今度の戦争を美化したり肯定したりしてはいけない、このような戦争は二度としてはいけない、どうか私たちの死を無駄にしないで日本の平和・世界の平和のために努力してください)という声を感

じます。そういう戦死者の衷心の訴えを尋ねて、その願いにこたえていこうとすること、これが本当の(とむらい)であり、(戦没者の供養)でありましょう。

それに、(お国のために戦って亡くなられた)といいますが、今日の調査では、軍人・軍属の死者230万の中の6割にあたる約140万人は餓死または病死であると報告されていて、日本政府が兵卒の生命をいかに粗末に扱ったかが問われています」

**L** 「戦没者を慰霊するとは、戦争行為を肯定することではなく、戦争の悲惨さを私たちが心に刻みつけ、今度の戦争の罪深さを私たちが真剣に反省懺悔することなのですね、それが本当の(戦死者への供養)ではないかという

ことですね。

鎌倉時代に、戦争犠牲者の供養を行いました。日本人だけでなく敵の蒙古軍の死者も共に供養したと伝えられていますね」

**L** 「インドのアショカ王も戦争

を悲しみ、敵の死者も悼んでい  
ます」

D 「それに比べて靖国神社には、  
戦死した日本軍の兵士しか祀っ  
ていません。」

L 「どうしてなのですか」

D 「靖国神社はもとあつた東京  
招魂社を明治1年に改称したも  
のです。東京招魂社は戊辰戦争  
や西南戦争で戦死した官軍の兵  
士を祀るために造られました。  
官軍（朝廷・天皇）のために亡  
くなった戦死者だけをまつると  
いう極めて特殊な神社でした。  
西南戦争で官軍と戦った西郷隆  
盛などは祀られていません」

L 「朝廷・天皇のために戦死し  
た兵士のみを祀るための東京招  
魂社が靖国神社の元になってい  
て、その理念は靖国神社に継承  
されているのですね」

D 「靖国神社はそういう意味で  
天皇と戦争とに密接に繋がって  
いて、日本全体のために戦死し  
たのではなく天皇のために亡く  
なった兵士を祀るといふ、そう  
いう理念を引き継いでいます。  
ですから空襲や原爆また沖縄戦  
で犠牲になった多くの日本人戦  
死者は祀られていません。そう  
いう意味で靖国神社には偏狭な  
思想が根底にあります」

L 「戦争中、戦死しても靖国神  
社に祀ってもらえると思つて死  
んだ人がいますか」

D 「ええ、そういう教育を時の  
政府がしたのですね。〈敵と戦つ  
て死んでも靖国神社で神と祀る〉

という思想は、戦争を遂行し、  
勇敢に兵士を戦鬪に臨ませるた  
めに、極めて有効な思想教育だ  
つたと思います。だから靖国神  
社は戦争遂行のために大きな負  
の役割を果たしたのですが、い  
まだこうした思想教育への反省  
がなされないままです」

L 「本願寺でも安土桃山時代に  
大阪本願寺が信長の激しい攻撃  
を受けたとき、信長軍と戦う真  
宗門徒に対して、寺側の指導者  
が〈進めば極楽、退けば地獄〉  
といつて戦わせたという話があ  
りますね」

D 「ええ、そういうスローガン  
を作り出して、死をも恐れず勇  
敢に戦わせたのですが、それ  
は真宗の教えに背き、寺側の権  
力に都合のいいスローガンでし  
た。こうした言葉は仏の言葉で  
はなく、凡夫の都合によつて考  
え出した言葉です。〈戦場で死ね  
ば靖国で神として祀る〉という  
考えは決して神様の言葉ではな  
く、時の政府が戦争勝利のため  
にひねり出したスローガンだと  
思います」

L 「誤つた教育は人も世も誤ら  
しめるのですね」

D 「靖国神社は、村の氏神や伊  
勢神宮や出雲大社などの神社と  
は違つて、近代日本の戦争と密  
接に連動してきた神社であり、  
〈国家即天皇のために死んだ兵  
士の靈魂を英霊（すぐれた霊い  
わば神）として祀るといふ靖  
国思想を、現在も色濃く持つて

いる非常に特異な宗教施設です」

L 「だから、靖国思想と異なる  
キリスト教や純粹仏教の人たち  
にとつては、受け入れがたい思  
想であり、靖国神社を国家で護  
持することには反対なのですね」

D 「ええ、ですから、〈国のため  
に亡くなった戦死者を大切に慰  
霊する〉という単純なものでは  
ありません。今度の戦争をどう  
見るか。靖国神社とは何か。ま  
た戦死者を本当に〈慰霊する〉  
とはどうすることか、などなど  
多くの問題を含んでいます」

L 「靖国神社国家護持法案は何  
度も国会に出されましたが廃案  
になっていきますね」

D 「国家が〈靈魂〉とか〈神〉  
とか、あるいは〈鎮魂〉とか〈慰  
霊〉などに関わるのは危険性が  
あります」

L 「なぜですか」

D 「神とか靈魂とか、あるいは  
鎮魂とか慰霊とかいうものは、  
それが一体どういうものかは客  
觀的に検証したり確かめたりは  
できません。といふことは、神  
とは何か、靈魂とは何か、慰霊  
とは何かなどを明確に示すこと  
も、又お互いが共に確認しあう  
ことも出来ません」

L 「客觀的に確かめられないか  
ら、共通の理解も出来ませんね」  
D 「そうです。たとえば純粹仏  
教では靈魂の存在すら、有ると  
も無いとも説きません。いわば  
〈靈魂は説かない〉のが仏教で  
すし、そういう純粋性をまもつ

ている浄土真宗では〈慰霊〉と  
いうことすら言わないのです。

**英霊とは何か。誰も本当は分か  
らないし、確かめようもない。**

分らないものを政治の場に  
持ち込むと、あとは勝手に〈神  
のお告げ〉とか、〈靈のたたり〉  
とか、〈英霊を侮辱するな〉とか  
いふ、そうした非合理的なもの  
が大手を振つて歩いたり、神が  
かり的な発言が出てきて、つい  
には権力を持った人たちが〈神  
性なものをけがすもの〉〈英霊を  
冒瀆するもの〉という名目の元  
に、自分たちに反対する人たち  
を弾圧しかねません。そういう  
ことは世界の歴史の上で数えら  
れないほどありました。道理に  
背くことでも、神の名や靈の名  
で、時には天皇の名で無理を通  
していく、戦前の軍部がそうで  
したね。最近のアラブの湾岸戦  
争では、イラクのフセインは〈こ  
の戦争は聖戦〉だといつて自国  
民を鼓舞しました。いわば神の  
意志で行われている聖なる戦争  
だといつたのです。本当に神の  
意志かどうか、だれが確かめら  
れるのでしょうか」

L 「政治の世界はお互いが確認  
できる道理に基づいて行われる  
べきですね。おっしゃる通りに、  
神や仏や靈などに対する考えは  
人それぞれで違いますし、また  
何とでも解釈できるものですか  
ら、解釈の仕方では非常に怖い  
ものにもなりかねませんね。と  
ころで軍人戦死者の人々をどう

私たちは弔つたらいいのでしょ  
うか。」

D 「私たち日本人はこのたびの  
戦争で外地に行つて大変苦しい  
目をして亡くなられた戦死者の  
方々を正しく追弔することが大  
事です。真宗大谷派でも本願寺  
派でも毎年、軍人だけでなく戦  
争で亡くなられたすべての死者  
を弔う法要をしています。

もし国家が戦死した兵隊さん  
を弔うなら、靖国神社ではなく  
て、どんな宗教の人でも、ある  
いは宗教のない人でもお参りで  
きるメモリアルのような施設を  
造つたらいいと思います。アメ  
リカでは真珠湾攻撃で亡くなつ  
た多くの兵士のために立派なメ  
モリアルが造られています」

L 「神社ではだめなのですね」

D 「私たちは平生、意識してい  
ませんが、神社には固有の神道  
思想および宗教儀礼をもつてい  
ます。ですから、神道の思想や  
儀礼と違つた宗教や思想をもつ  
ている人たちにとつては神社へ  
の参拝は違和感を感じると思い  
ます。ことに靖国神社のような  
特異な神社に対しては、真宗の  
熱心な門徒やキリスト教徒など  
にとつては抵抗あるいは苦痛を  
感じる場所ですね。

それに、遺族の中には〈戦死  
した息子は靖国神社になんか帰  
つていない、私たちの先祖や親  
のところへ帰つていない〉といふ  
人たちが沢山いることも忘れて  
はなりません」 (了)

# 真宗聖典講座

「念仏には無義をもって義とす。不可  
称不可説不可思議のゆえに、とおおせ  
そうらいき」 (歎異鈔第十章)

現代語訳(本願他力の念仏においては、  
自力のはからいがまじわらないことを根  
本の法義とします。なぜなら、念仏はは  
からいを超えており、たたえ尽くすこと  
も、説きつくすことも、心で思いはかる  
こともできないからですと、聖人は仰せ  
になりました)

## 〈歎異鈔第十章第一講〉

〈無義をもって義とす〉すなわち〈義  
なきを義とす〉という言葉は、もともと  
法然聖人の仰せられたお言葉でした。親  
鸞聖人のお手紙の中に

「弥陀の本願を信じそうらいぬるうえに  
は、義なきを義とすところ、大師聖人の  
おおせにてそうらえ」

とありますように、大師聖人(法然)の  
仰せでした。

この〈義なきを義とす〉というお言葉  
はよほど親鸞聖人にとって大事なお言葉  
であったようで、聖人のお手紙の中にし  
ばしば出てきます。

弥陀の誓願不思議は、不思議なる故に  
不思議と信じて念仏申すばかりです。そ  
れが「義なきを義とする」のです。にも  
かかわらず、弥陀の誓願不思議に私の思

議(自分の思い)をはきんで、自分に理  
解可能な教えに変形して受けとろうとし  
ます。そういうところに、聖人の仰せに  
異なるさまざまな異義が発生するのです。

私も若い頃、弥陀の誓願不思議を「ど  
う受けとるべきか」に悩み、知らず知ら  
ずのうちに、弥陀の本願を自分の考えに  
無理に合わせ、本願を受けとろうと  
していたことを思い出します。こうした  
誘惑は今も私の中にありますから気を付  
けなければならぬと思っています。

若い頃の〈考え〉の一つを申しますと、  
弥陀の誓願不思議とは何かについて「阿  
弥陀仏とは限らないのちの働きのこと  
である。いのちの働きは実に不思議な働  
きというほかはない。大自然を見よ。太  
陽も空も緑も花も実に自然の営みは不思  
議であり素晴らしい。そればかりではな  
い。自分の身体のいのちも不思議ではな  
いか。目がものを見、耳は音を聞き、心  
臓は休み無く動き、神経は体の隅々まで  
働いている。じつに不思議である。その  
不思議を誓願不思議という。そうした大  
自然の不思議に生かされていることに気  
がつくことを〈本願を信じる〉というの  
だ」

というような自己流の解釈(自見の覚悟)  
をし、そうして自分の考えの枠組みに弥  
陀の誓願不思議を取り込んで、教えが分  
かったつもりにしていました。

こういうような操作をいろいろ無自覚  
にほどこして弥陀の本願を何とか分かろ  
うとしたことが何度もありました。こ  
ういうことは、今から考えれば弥陀の誓  
願不思議に対して〈おのれのはからいを  
まじえる〉いとなみでした。

しかし心は正直なもので、自分の考え  
をさしはきんで弥陀の本願をいくら受け  
とつても、心の底は依然として暗く、〈救  
われた〉という自然な実感はありません  
でした。

〈自力の計らい〉という、何か厳し  
い修行をして助かろうとすると、道徳  
的な善行をたのみにすると、特別なこ  
とを考えてしまいます。それも自力の計  
らいでしょうが、一番見分けにくいのは、  
弥陀の本願を、自分の考えで理解できる  
ように受けとる、いわば〈自分の思い〉  
に納得することを優先させてしまうこと  
です。そして、自分に納得できなければ、  
納得できるような解釈を弥陀の本願にほ  
どこして、分かったことにしてしまう、  
その全体が〈自力の計らい〉でありまし  
た。

すなわち自分の知的能力で弥陀の本願  
を計量し、自分の考えのモノサシに合う  
ものを受け取り、合わないものは自分の  
モノサシに合うように弥陀の不可思議の  
本願を解釈しなおすのです。

歎異鈔第一章の「弥陀の誓願不思議に  
たすけられまいらせて」と言われている  
弥陀の本願とは何でしょうか。それは、  
私がいろいろ勝手な思案をするまでもな  
く、歎異鈔の中に表されている通りです。

「誓願の不思議によりて、たもちやすく、  
となえやすき名号を案じいだしたまいて、  
この名字をとなえんものを、むかえとら  
んと、御約束あることなれば、まず弥陀  
の大悲大願の不思議にたすけられまいら  
せて」 (第十一章)

とありますように、「名号を称えるものを

むかえとらん」という弥陀の御約束のこ  
とです。いわゆる「弥陀が必ず助ける。  
ただ念仏申せ」という不可思議な誓いで  
す。ですから法然上人は、この思召し  
を「ただ念仏して弥陀に助けられまいら  
すべし」(歎異鈔第二章)と親鸞聖人に仰  
せられたのです。それを受けて聖人は「善  
き人の仰せをかぶりて信じるほかに別の  
子細なきなり」と申されたのです。そし  
て「念仏は浄土に生まれるタネであるか、  
あるいは地獄に落ちる業か私は全く存じ  
ません」と仰せられるのです。「助けるで  
我が名を称えよ」という不思議な弥陀の  
誓いを、知性で納得してからではなくて、  
ただ単純に仰せのままに順われたのです。

〈弥陀の本願はウソかマコトか〉を調べ  
る必要もなく、あまりの本願の有り難さ  
に驚かれたのであります。幼子が親の言  
うことを理屈なしに聞き受けるようにい  
ただかれたのです。弥陀の本願の大悲は  
かくして聖人の全身に貫いたのでありま  
しょう。本願救済の道理・理屈は分から  
ぬまま、救いの事実は経験的に聖人の上  
に実現したのでした。

そしてその上で聖人は、なぜ弥陀の本  
願が万人救済の道理であるかを知的に理  
解する作業を展開していきました。本  
願を信ずる一点においては論理的な知的  
理解を全く必要とせず、ただそのまま受  
け入れるだけです、しかしひとたび己の  
上に成就した信心は、本願の救済原理へ  
の知的理解を人に求めるものであります。  
それによって人々が本願へ導かれ、本願  
への理解を深めていくことが出来るので  
す。こうしたいとなみの結晶が、真宗の  
根本聖典である、聖人の著された「顕浄

# 信仰夜話

(了)

チリほども よきことあれば

迷うのに

まるで悪うて わしが幸せ

新蔵同行

人生に調子が良くなると無常を忘れて油断し、たまさか仏法気らしい心や清らかな心が起こると「これでこそ」と自分の心をたのんで弥陀のご恩を忘れる。

チリほどの世間の有利な地位や能力や財産の豊かなのを、身についた幸せと想うて、世間的な栄えを誇りに思う。

我が心は迷い心やすきゆえ「チリほどのよきことあれば」それにおいて安心し、それを誇りに思い、我が身の幸運をほくそえんでいる。そのようにして仏智を軽んじ、世間的な見方で物事を見てしまう。

チリほどもよきことなく、不都合なことが多ければ、愚痴が出てしまうのが私たちが、新蔵同行は「わしが幸せ」という。仏恩一つに心を寄せておられる。

みすばらしくお粗末な自分を「助けずにはおかない」と思し召したって、五劫の間思索し、永劫の間ご修行を、こんな私のためにしてください。まるで悪いだけの者を導き、引き寄せ、浄土へと迎え入れ、仏とまで成してくださいさるとは、何と広大な慈悲であることよと、新蔵

同行は我が身の幸せを喜んでおられる。

禿頭誠師は新蔵のこの歌に寄せて

まるでよいのが まるで悪い

まるで悪うて わしが幸せ

と歌っている。まことに真宗信心の味がゆたかに歌われている。

自我中心の都合にとっては「よい」と思っていることが、仏法からは「わるい」のであり、自我からは「わるい」ことが仏法には「よい」ことなのである。こういう価値転換の徹底したすがたが、この歌に表されている。

## ◎向坊弘道さんの聞法

北九州市に向坊弘道さんという方がおられる。氏が今年の4月にS寺で講演されたビデオテープを拝見させていただいた。氏は昭和13年の生まれ。東京大学に在学中、車で事故に遭って四肢麻痺という重傷を負い、重い身体障害者になられた。動かぬ体となって、絶望の日々を送っておられたが、たまたま月参りにこられた住職さんから小さな仏教書を手わたされ、それがご縁で真宗の学びが始まった。幸いすぐ近くにお寺があり、法座には欠かさずお参りして聴聞をするようになった。それが26才の時。それから雪の降る寒い冬には毛布をかぶり、暑い夏には頭を水で冷やしながら、寺の境内で堂内から聞こえてくるお説教を聞いた。身体障害のため本堂への階段が上がれないから本堂の外で聞法されたのである。「この話を聞き遂げたら死んでもよい」という思いで、冬には寒さに身を震わし、夏

には熱風にさらされながら、お説教の声に頭をたれて聞き入られたのである。30才になって突然、阿弥陀仏の慈悲心に目が覚められた。その時一転して心が開け、我が身の幸せを喜ぶ身となられた。その後、真宗の伝道・仏教福祉の活動と、健常者をはるかにこえる素晴らしい活動を続けておられる。

このビデオテープを見て感動したのは氏が本堂の外で、「このこと一つを聞き遂げずには死ねない」と、一途に仏法に耳を傾けられた姿である。

真宗はまことに難信の法である。なぜか。法は「あら心得やすの安心や」と蓮如上人が申される如く至って安き法である。しかるに、広劫以来の「われ賢し」の橋慢心が邪魔をして耳がふさがっている。仏法をいくら聞いても橋慢心が強きゆえ、山の頂きには降る雨がたまらない如く、聞いた仏法が我が身にとどまらず流れ去っていく。

向坊氏は重い障害に遭い、人生の夢を断たれ、その中からただ一つ「仏にいたい」と地面に身を屈して仏法に最後の望みをかけられたのである。本堂の縁の下で、カエルのように、寒風にさらされ、熱射を浴びながらの聞法の日々は、やがて氏の橋慢心を砕いていった。数年の後、遂に阿弥陀の大悲は氏の魂に深々と流れ込んだ。如来の大悲は氏をよみがえらせたのである。

S寺での氏の講話の最後に、「ご任職みずから質問をされた。「どうしたら私は仏にあえますか。これが私の最大の問題です」と。この質問に対して、氏はある女性の話をされた。

『私の知っている女性で、やはり若いときから（ご信心がいたきたい。仏にいたい。このこと一つが人生の目的）という志で生きられた方がいます。二度の火事にもあつて財産を無くしたが、「そういうことはどうでもいいこと。ただ信心をいたしたい」と言って、長年聞法に励まれた。しかし、容易に真実信心はいただけない。年齢も70才をこえた。もう生きて幾ばくもない。切羽詰まった彼女はとうとう毎夜真夜中の2時に墓場に行つて、線香を立てて燃え尽きるまでそこで正信偈を上げた。ところが2ヶ月半たった頃、突然「ああそういうお心でしたか」と阿弥陀仏の大悲にであわれた』と。大事なことは真夜中に墓に行くとか行かないとかではあるまい。「このこと一つを聞き遂げずば、死ぬに死ねない、生きるに生きれない」という一途な聞法の大さである。このことを氏は強調されたのだと思う。(了)

## 〈任職つれづれ日誌〉

\*五月十二・十三日。同朋会館へ。岐阜県のご門徒といろいろ話し合う。真宗門徒から念仏申すことが無くなっていく傾向を近年感じることが多い。念仏のない浄土真宗は一体どこへ行くのか。

\*娘夫婦が三カ月ぶりに無事帰国。長時間の飛行機でかなり疲れている様子。一緒にお寿司をとって会食し、旅の思い出を語りあう。

\*難波別院で久しぶりに法話。来られる人は少ないが、熱心な方々が多く、話しやすい。法要などで義理参りの方が多く、私のような信力の乏しいものは話しにくいものである。

\*五月二十八日。朋友会。「行と信」について発表。今回からUさんが参加。大阪教区のあり方に議論沸騰。

